

2003年度卒業論文紹介

1. 小川梨絵

バウハウスにみるモダン

バウハウスとは、1919年から33年まで活動していた建築と造形の学校である。しかし同時に著名な芸術家たちの属した集団であり、工業製品あるいは実験的製品を生み出す工房であり、造形教育理論の確立者であり、家具や日用品のブランドでもある。バウハウスのこの多様性は非常に興味深いものだが、私はその「モダンさ」にこそ興味をひかれる。というのも、それらが70年以上前のものであるにも関わらず、昨年ベルリンの「バウハウス資料館」を訪れて実際に見た作品の多くが、現代の私にとって純粋に「モダンでおしゃれ」だと感じられたからである。実際にバウハウスはデザイン史上、現代デザイン理念の確立者と位置づけられているし、その製品は、最近のインテリア雑誌などにも現在に通用するデザインとして取り上げられ、また今なお販売もされている。70年以上も前に、バウハウスはどのようにして現代デザイン理念を確立したのか、そしてなぜ今でもモダンなのか？ バウハウス15年の歴史をたどりながら、この疑問の答えを探していきたいと思う。

バウハウスの歴史に入る前にみておきたいのが、当時の芸術及び工芸の動向である。工芸などは応用芸術、絵画や彫刻などは純粋芸術として、両者はすでに15世紀ごろから分化してきていたが、このころそれを再び統合しようとする動きが盛んになりつつあった。その中でも特に重要なのは、19世紀イギリスでウィリアム・モリスが起こしたアーツ・アンド・クラフツ運動である。彼は産業革命以降の機械による芸術性の低い大量生産品を否定し、中世の労働形態を理想として、工房で人の手だけによってさまざまな芸術性の高い身の回り品を製作し、芸術と日常生活とを近づけようとした。機械生産を認めない彼の思想は、時代の流れに反してはいたが多くの支持を集め、バウハウスの創設者ヴァルター・グロピウスにも少なからず影響を与えていることが、バウハウス初期の手

工芸賛美や中世的な工房生産活動などにみとれる。その他フランスを中心に盛んだったアール・ヌーボーもまた、工芸との接触を試みた芸術運動であった。流れるような曲線、植物モチーフといったアール・ヌーボーの様式は一大流行となったが、装飾が機能性より重視されたことや機械生産に積極的ではなかったことから、芸術と工芸の統合という点では成功をみなかったといえる。

さて、イギリスより一世紀も遅い産業革命の後、ドイツでは「ドイツ工作連盟」が結成され、芸術家や工芸家、商業家などさまざまな分野のメンバーが「ドイツ製品の質的向上」を目指していた。この工作連盟は「産業の芸術化」という意味で、モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動の流れをくみ、バウハウスの前身とされるものである。主導者のヘルマン・ムテジウスは、産業でイギリスに勝つために製品を徹底的に規格化することを主張し、その理念は後のバウハウスに生かされている。

一方、純粋芸術のほうでも、19世紀ごろから変化し始めていた。特にピカソらを中心としたキュビズムの、対象を分解して画面上で再構成するという方法は、多くの芸術家たちに影響を与えた。その中には、後にバウハウスに教師として招聘されるパウル・クレーやワシリー・カンディンスキー、バウハウスに影響を及ぼしたオランダのグループ「デ・ステイル」を結成したピエト・モンドリアンらがいる。モンドリアンは自らの抽象絵画を建築や工芸において実践し、「デ・ステイル」の原色づかいや単純さ、法則性、そしてまた工芸との融合という点においてバウハウスに大きな影響を与えたのである。しかしこれはまだ後のことであり、初期のバウハウスは表現主義的傾向が強かった。敗戦後のドイツでは、破壊された文化、芸術、精神性の回復が求められ、ユートピアを夢想する表現主義の熱狂が渦巻いていたのである。また多くの芸術家が社会変革を目指し政治や教育と関わりを持った。そうした当時の前衛芸術家たちがバウハウスに招かれ、教鞭を振るったのである。

バウハウスには、キュビズム、「デ・ステイル」、構成主義、表現主義などのさまざまな芸術の方法が教師たちによって伝えられたし、アーツ・アンド・クラフツ運動やアール・ヌーボー、ドイツ工作連盟など工芸運動の理念も取り入れられている。先駆者たちの理念とバウハウスの理念は当初とりたてて違うものではなかったが、後に「手工作」が「機

械生産」に置き換えられるなど、時代に即した柔軟性を持って変遷していったこともバウハウスのすぐれた点ではないだろうか。

こうした流れを受けて、1919年の4月、グロピウスによる声明文「バウハウス宣言」とともに「ヴァイマル国立バウハウス」が設立される。「バウハウス宣言」で説かれているのは前述のように手工芸の重要性であり、建築を頂点としたあらゆる造形活動の統合であり、この理念に沿って実際のバウハウスの活動が展開されていく。

宣言にみられるとおり、バウハウス教育の中心は工房における手工と芸術の教育であった。開校に際してグロピウスはもとからあった美術学校の教師のほか、3人の芸術家を教師として招聘した。その中でも大きな役割を果たすのが、画家であり芸術教育家であったヨハネス・イッテンである。彼の考案した「予備課程」と呼ばれる基礎造形教育は、模写を中心とした従来のアカデミーのものとは違い、個人の体験を重視したもので、バウハウス教育の基礎となるものである。

しかし「戦後」が終わるにつれ、バウハウスは方向転換をし始める。手工芸よりも機械生産が視野に入れられ「典型的な製品」の創造が目指されるようになり、イッテンの、個人の感性を重視するやり方や「芸術のための芸術」という考えはそれにそぐわなくなってくる。グロピウスとの衝突の後イッテンはバウハウスを去り、23年、バウハウス後期の基本テーマとなる「芸術と技術—新しい統一」が発表される。それからバウハウスは機械技術、工業との関わりを深くしてゆくのである。

イッテン以降の予備教育は、生徒であったヨーゼフ・アルバースとハンガリーの構成主義芸術家ラスロ・モホリ＝ナギが担当し、さらなる発展をとげた。カンディンスキーやクレーも色彩論や形態論を受け持ち、論理的な面を支え、また彼らの抽象画の方法をバウハウスに取り入れた。

1925年、バウハウスはヴァイマルからデッサウへと移転するが、理念において何ら変わりはなく、その理念が実際に展開される。それまでの工房のほかに実験工房が設けられ、機能的で丈夫・安価でしかも美しい製品の製作が行われた。それは機械工業時代にふさわしい典型的な製品のモデルを開発することであり、バウハウスの教育機関としての性格と生産事業体としての性格の分離を明瞭にするものであった。

こうした理念と教育のもとで、すぐれたデザインの製品が数多く作ら

れた。現在も販売されているランプや金属器、家具類は機械生産のためになるべく単純に、しかも芸術性が高く丈夫に設計されている。

グロピウスが校長職を退いた後、建築家のハネス・マイアー、ミース・ファン・デル・ローエがその跡を継ぎ、社会的な立場から工科大学へと変貌していくが、ナチの弾圧によって33年に閉鎖される。

最後に、バウハウス製品のモダンさを考えるとき、理念と教育がその根底にあると私は考える。「芸術と技術—新しい統一」というテーマのもとで、芸術と機械技術を結びつける試みがなされ、大量生産された安価で芸術性の高い製品が日常生活において使用されうようになった。そしてその生産を支えたのは教育であり、それぞれの教師たちの教育の影響がバウハウス工房の作品に表れている。イッテンやカンディンスキーの教えた円・三角・正方形の「基本形」や赤・青・黄の「基本色」の概念はバウハウス製品の基本となっているし、抽象芸術の「簡略化」という方法もマルセル・ブロイアーの家具をはじめとした製品に表れている。前述の「予備課程」は、改良を加えられ現在の造形教育にも取り入れられるほどすぐれたものであった。

現代の我々の日常生活の中に、デザインのある製品はあふれている。「すべての造形活動の最終目標は建築である！」というグロピウスの言葉どおり、住居という一つの建築の中にさまざまな造形、デザインが統一体をなしている。我々の生活に、グロピウス及びバウハウスの理念は息づき、実践されていると私は考えるのである。

2. 齊藤公輔

1989年革命の素地

1989年は世界の構図が大きく変わった年であった。東欧革命とベルリンの壁崩壊が最たる例であるが、なぜこの「革命」が起こりえたのかをDDR国内にのみの視点を絞って考察するものである。その際、1953年6月17日事件、DDR国内の主な反体制活動家および教会の果たした役割の3項目と1989年革命の関連を探る作業を中心に進めていく。

1953年6月17日事件は、DDR史上初めての大規模な反体制デモであった。ベルリンの労働者に端を発したこの騒動は瞬く間に全国に広がり

をみせ、経済的・政治的要求を叫びながらストライキにはいる。しかしすぐにソ連軍が介入し鎮圧、多くの死者を出す惨事となった。

ここで注目すべき点は2つである。一つはソ連の動向である。1953年においては市民を武力で圧倒するなどDDR政府よりの動きをみせるが、1989年においてソ連はDDR政府から明らかに距離を置いている。これは国際情勢と大きく関わり、1953年においては安定した社会主義国を目指すことが最終的に優先されていた一方、1989年においてはベレストロイカ、ヘルシンキ宣言などを主軸にした改革を優先していた。

もう一つは市民についてである。1953年および1989年双方の比較を行うことにより次のことが明らかになる。それは1953年から1989年を通して市民の不満はほぼ近似であるということである。経済的要求から政治的要求に移行した1953年であるが、最終的に1989年と同じ政治的権利を求める運動であったことが確認されている。また1953年は組織的ではない単発な行動であったのに対して1989年には全国規模の組織でもって挑んでいる。

DDRを取り巻く環境は1953年と1989年とでは当然違っている。それゆえ両者の有機的な関連性は指摘し難いが、1953年は多くの重要な教訓を残したという意味で1989年との関係は否定しきることができないだろう。

反体制活動家はローベルト・ハーヴェマン、ヴォルフ・ビアマン、ルドルフ・バーロを扱う。

ハーヴェマンは社会主義の克服こそ最終目標であると述べ、マルクス主義的見地から人間主義と自由を回復しようと努めた。ビアマンは市民権を剥奪されながらも西ドイツを中心にコンサートなどを通して自らの思想を伝え、現存する社会主義に対し絶望しながらなお社会主義の再建を目指そうと呼びかけている。バーロは主著『Die Alternative』において「現実に存在する社会主義」を批判し、マルクスの目指す真の社会主義・共産主義を呼びかけている。

以上から明かなように、当時の反体制思想とは反社会主義・反DDRというものではない。社会主義からの人間主義、真の社会主義を求める思想こそが当時の反体制運動であり、同時にDDRにこそ彼らはそれらの実現の地と信じていた。それは1989年と共通の見解である。1989年

革命においても求められたのは民主的な社会主義の建設であり、「我々はこの地に留まる！」というスローガンはまさに3人の反体制活動家の思想と全く共通のものであるといえよう。主に1960年代70年代を中心に活動したといえる3人の活動家たちであるが、彼らの思想基盤は1989年革命当時のそれと比較しても全く同じであるといえるだろう。

DDR国内において教会は独立した地位を獲得していた唯一の機関であった。その教会なくして東欧革命はなかったといわれている。独立した地位の庇護のもと多くの反体制グループが教会内部で活動をはじめたのは1970年代も終わりになってからである。その後内部で勢力を伸ばし、1989年革命へと結実した。

DDR建国当初の憲法に宗教の項目が設けられており、細かな規定が盛り込まれていた。またDDRの国立大学には神学部が設置されていた。これらは当時社会主義国としては異例のことであり、発足時からして教会は独自の地位を確立していた。1961年にウルブリヒトと教会が会談を行い「キリスト教とマルキシストの共同の人道責任」について合意に至った。これによって教会は出版社を持つことが許され、DDR消滅に至るまで独自の世論を形成する土台を得た。1978年にはホーネッカーと会談を果たし、国家および教会の独自性を認めるとともに、各々の範囲内での活動は可能との見解がもたれた。これによって教会内部での活動根拠が得られたのである。

また教会とは直接的な関係はないがヘルシンキ宣言も反体制グループに法的な根拠を与えた。1975年に東西ヨーロッパ35カ国が調印したそれは「人権と基本的自由の尊重」を掲げており、ペレストロイカと並んで東欧革命の原動力になった。

1980年になると教会内部において活動が活発化、教会内部に国家の詮索が入るなど緊張が増すとともに、ますます多くの市民が教会内部で活動することとなった。

教会は以上のように反体制グループの駆け込み寺として機能していた。特殊な地位があったからこそ可能であったわけだが、1989年革命直前になると様子はやや変わってくる。「新フォーラム」は1989年革命を推進したとして有名であるが、これは非教会系のグループである。教会は自らの地位を守ることに固執する傾向が強まり、80年代後半になるとグル

ープとの関係は悪くなっていった。そこから非教会系グループが台頭してくるわけである。しかし、そうはいっても教会が果たした役割の重要性は否定できない。教会なくしてはグループの基礎を育む場所さえなかったからである。

以上 1989 年革命との関連性を踏まえながら考察してきた。1989 年革命において重要なキーワードは「社会主義」と「自由」であろう。このキーワードは 1953 年 6 月 17 日事件から一貫してみられることであり、その意味で DDR 国民の要求、思想的基盤は常に同一であったといえるだろう。1989 年革命の素地とは、DDR 市民が真の社会主義を求めたところに帰結するのである。

3. 杉田育代

ブレヒトが目指した演劇

ブレヒト (Bertolt Brecht) は演劇をどのように捉えていたのか。ブレヒトにとっての演劇とはなんだったのか。私は高校時代演劇部に所属していたこともあり、今でも劇を観ることがとても好きだ。だが、ブレヒトを知るまでは演劇をただの娯楽としてしか認識していなかった。ブレヒトの演劇は、観客を舞台に巻き込む (感情移入させる) のではなく、観客を観察者にし、社会に対する批判を下せるようにするのが目的である。そのために彼がどれだけの工夫をしているのか知っていくうちに、私はブレヒトの姿勢に感動し、共感するようになった。ブレヒトの使用した、見慣れたものを異常化することによって問題を際立たせる異化効果は、現代演劇に大きな影響を与えている。人に訴えかけよう、人を、社会をもっと良くしよう、という意志を強く感じた。しかし、それでもブレヒトの演劇が政治批判に偏りすぎることはない。彼にとって演劇はあくまで芸術なのである。後に体系化される叙事的演劇へ向かう流れの中で、ブレヒトを世界的に有名にした初期戯曲作品『三文オペラ』 („Die Dreigroschenoper“ 1928) を通して、彼にとっての演劇とは何だったのかを見ていく。

舞台はロンドンのソーホーで、乞食や売春婦、盗賊が闊歩する犯罪者街である。話は、乞食業を企業化して生計を立てている乞食王ピーチャ

ムの娘ポリーが、悪名高い盗賊のメッキースに誘惑され、婚約してしまうことから始まる。ピーチャムは、ポリーを玉の輿に乗せようとしていたのでそれを知って激怒し、メッキースを密告する。しかし警視總監タイガー・ブラウンは、メッキースとはインド植民地戦争時代の戦友という関係にあり、逮捕するのは忍びない。しかし逮捕しないと女王の戴冠式に乞食の軍勢をけしかける、とピーチャムに脅されているため、しかたなくメッキースを指名手配する。それを知ったポリーはメッキースに逃げるよう説得するが、メッキースは売春宿に通うという習慣をやめなかったために、ピーチャムの妻が買収したなじみの売春婦ジェニーに裏切られ、逮捕される。しかし監獄にて、ブラウンの娘ルーシーもメッキースに誘惑されていることが判明する。ルーシーは甘い言葉に唆され、メッキースを逃がす。さてジェニーはピーチャムの妻に報酬を請求するが、メッキースが逃げてしまったのだから払えないと拒否される。うまく逃げる事ができたメッキースはどうしていたかという、やはり国外へ逃げずに売春宿へやってきていた。そこでもう一度ジェニーに裏切られ、メッキースは再び逮捕される。何とか逃げようとするが今度ばかりはどうにもならず、死刑を宣告されてしまう。そして後一步で絞首台へ上るという絶体絶命の場面で、女王の使いで馬に乗ったブラウンが登場し、メッキースは恩赦を受け、貴族に列せられ、年金を賜るというのがおおまかなあらすじである。

登場人物に対して受けた印象は、全員がとても利己的であるということだ。ここに登場する人物たちは、皆自分の幸せを第一に生きていて、自分の利益のために他人を陥れることを何とも思わない、他人を思いやる人間らしい心がほとんど見られない人物ばかりだ。この劇中では、道徳を逆手に取った商売や人間関係が繰り広げられ、既成道徳は激しく攻撃されている。人物を皆善良な人間として描かなかったことも、観客が必要以上に人物に感情移入しないようにするためのひとつの手段だったのではないかと思われる。劇中の誰か一人に感情移入してしまうと、観客はその人物の目線から物語を見るようになってしまう。すると観客は客観的に判断を下せなくなる。プレヒトはそれを慎重に避けようとしていた。もちろん、人々の影の部分に誇張することによって、観客により大きなインパクトを与えるという効果もあるだろう。

次章では『三文オペラ』の原作であるジョン・ゲイ（1685-1732）の『乞食オペラ』と比較しながら社会と人物について見てゆく。ゲイの『乞食オペラ』をより複雑に、批判性や笑いも深く改作したのが『三文オペラ』であるといえる。また『三文オペラ』に到るまでのブレヒトに影響を与えた出来事について、グラッベ（Grabbe）、ビュヒナー（Büchner）、ヴェーデキント（Wedekind）などの作家の影響も考えて論じる。

また、この戯曲の大きな特徴である音楽について、また異化効果についてみてゆく。ブレヒトはこの劇中で非常に特殊な音楽の用い方をした。それは後に異化効果という名前をつけられるものだ。異化とは、既知のものに少し手を加えることによって当たり前のものを目立たせ、人をはっとさせるという手法である。当然だと思っているものを際立たせることによって、本当にそれが当たり前のことであるのか、考えさせるきっかけを与えるのである。異化と呼べる表現は既に『三文オペラ』でも多く見られる。異化を意識して作品を読んでいくと、ブレヒトの作品に対する姿勢がよくわかる。

演劇としての『三文オペラ』を観る機会は残念ながらなかったが、映画は二作観ることができたのでその感想の後、まとめとして自分が考えるブレヒトにとっての演劇と、これからの演劇について論じた。拙稿を通して少しでもブレヒトや演劇について興味を持っていただければ幸いである。

4. 森 かおり

ドイツにおける若者語

—その言語構造・役割の特徴を探る

若者語研究というと、いかにも現代的な研究分野というイメージが付きまとうが、実際に「若者語」が特に学生語（Studentensprache）としての名称でドイツ語史に登場するのは、17世紀にもさかのぼる。その後、様々な変遷を経て（17世紀から19世紀における Studentensprache, Pennälersprache, 1901年に設立された Wandervogelbewegung, 50年代の Halbstarkenbewegung, 70年代 Teenager- und Twensprache, 80年代 Scene-Deutsch）、現在の「若者語」にたどり着くのだが、「若者語」と

いう言葉の響きをもつ一義的なイメージとは反して、それはしばしば年齢的制限を持つ「グループ語」（ここでは特に若者といわれる年代に制限される）と表現されることがある。というのも、若者の日常生活において起こりうる様々な人間関係（恋愛・大学・学校・バイト等）や趣味・興味（スポーツ・音楽等）などによって、若者たちは無意識にグループ化しており（その際、個人が様々なグループに属している）、その個々のグループにおいて話し方が変わったり、グループ内でしか理解できないような言葉（あだ名であったり、特定のものを指す言葉であったり）を使うことで、若者の間でもグループごとに言語的な変化が見られることは必至だからである。

今回の論文において、私はグループ語として様々な相互相違を見せる若者たちの言葉をアンケートをとることによって少しでも「若者語」としての共通項を探すことを目標とした。

まず、言語構造的特徴として挙げられるのは、①外国語の使用、特にAnglizismen（英語の使用）、②縮小形語幹 Diminutivsuffix -i, -ö, -le、③融合形 Verschmelzungをはじめとする語末音消失 Apokope・語中音消失 Synkope、④造語 Wortbildungまたは新造語 Wortneuerschöpfung、⑤誇張 Übertreibungである。若者がよく使用する挨拶言葉という身近な例をとると、それぞれには次のようなものがあげられる：①Hi, Hey, Bye ②Hallöchen, Tschö, Tschüßle ③Machts gut, Ich verzieh' mich, Wir seh'n uns ④Tachpost, Bierjunge ⑤Einen wunderschönen guten Tag, Einen wundervollen, sehr guten Morgen.

以上のように言葉で遊ぶことで、若者の感情に及ぼす作用というのはどのようなものがあるかを考えてみると、まず第一に若者たちにとって会話をするうえで大切なこととは、いかにその会話を楽しむか、面白くさせるか、ということである。これはモノトーン調で退屈な大人たちに対するプロテスタントであり、若者たちは感情的に彼らに依存することを嫌う傾向がある。人生経験が豊富で、モラル意識の高い大人たちに対して若者が頻繁に感情を表す手段としてののしり言葉（突発的な喜びにFuck, 冗談でArschloch, Wichserなど）を使用することも彼らが大人たちとの間に境界線をひいていることの表れである（Abgrenzung）。反対に若者同士はどうかというと、親愛表現が多い。仲間同士を示す言葉

として親族を表す言葉 (Bruder, Kinder) や、古くからという意味合いでもって Alter, Altes Haus と表現したり、Diminutiv (Hasi, Schatzi, Schnuffi)、動物 (Hase, Mäuse, Bär) を示す言葉でもってお互いの信頼関係を表現し、仲間意識を強めている (Wir-Gefühl)。また、富の象徴でもあるお金・車・服などを示す言葉にマイナス表現が多いことも、若者が将来起こりうる理想と現実とのギャップに苦しんでいることが分かり、それらをマイナス表現することによってギャップの落差を少しでも縮めようとしている。(お金: Kohle, Mäuse, Asche, Knete, Kies, Steine, Mücke, Floh, Pinke。車: Karre, Prunkprotzkutsche, Luxeskarosse, Schlitten。服: Klamotten, Etzen, Umhänge, Zwirn, Lumpen, Kutte, Sack)。つまりこのマイナス表現と言うのは彼らの自己防衛の道具の一つであり、この自己防衛を強めるためにさらに上で述べたような仲間意識を必要とする。

以上、簡単に若者語共通の特徴を述べてきたが、「若者語」という言葉を確立することは難しく、これらの言葉の多くはある特定の時代における若者の話し方の特徴であり、多くの言葉は短い期間に消えてゆき、様々な構造変化を経てまた新たな言葉が生まれてくる。めまぐるしく変化するモードのように、自分の個性を飾り立てるアクセサリーを選ぶように、若者たちは自分にあった言葉を選びそれを楽しんでゆくのである。

5. 横山広明

イラク問題にみる米欧(独)関係の変容 ードイツの視点からー

私はこの論文で、イラク問題を巡りドイツ政府が展開した反戦外交に焦点をあて、その背景にある政治的動機、そしてそこから伺える今後の米欧(独)関係の展望について考察しようと試みた。

そもそも、このアクチュアルな問題を取り上げる直接的契機となったのは、米国主導の対イラク武力行使に対し、ドイツ国内はもとより世界各地で繰り広げられた市民の平和・反戦運動である。そしてこの高揚した反戦気運を、私は滞在先のドイツにおいて体験する事になった。即ち、この偶然的接点が私にこの問題を扱わせる契機になったと言えるだろう。

ただ、この時点において私の関心は専ら市民運動に注がれていたものであって、その視点が後に市民から政府―ドイツの外交政策、国際政治―へ向けられることになるには或る理由があった。

国連安保理を舞台に、対イラク武力行使の是非を巡って激しい議論の応酬がなされていた頃、仏独両国は査察継続を主張し、武力行使を主張する米英に最後まで抵抗する姿勢を示していた。しかし、仏独の対応を巡る楽観的憶測―対イラク武力行使が不可避だと判れば、両国は結果的に米国支持に回るはずである―が飛び交っていた状況において、米欧（独）間の対立を一時的なものと捉える向きがあった。それ故、最後までフランスと共に米国支持に回らなかったドイツの外交姿勢は米国側にとって大きな誤算であったし、同盟国による造反行為と映ったに違いない。そしてこの意外性こそが、ドイツの反戦外交の背景にあるものに目を向けさせることになったのである。

イラク問題を機に顕在化した両者の対立は、単に「戦争か査察継続か」という問題を越えて、大西洋を挟んだ深い断層の存在―米欧（独）関係の変容―を国際社会に露呈する結果となった。つまり蜜月の関係を築いてきたと思われた米欧（独）関係は、実際はいつ頃からか亀裂を生じていたのであり、今回のイラク問題に至って、もはやそれは看過できない域に達していたと解釈できるのではないだろうか。そしてここで欧米間の亀裂がいつ、どのように生じたのかという疑問を解明するために、私は戦後ドイツ政治の根幹をなした「独米関係（NATO）」と「独仏関係（EU）」という2つの視点から捉えようと試みたのと同時に、それら同盟関係の本質と国際情勢を踏まえた上で、再度、独仏×米国の対立構図を考察する事がその背景にある政治的意図を探る手掛かりになるのではないかと考えたのである。

戦後、ドイツは基本政策として欧州における和解と復興、そして戦争の根絶という観点から対仏協調路線を敷く（この独仏関係が後のヨーロッパ統合を進める過程で中心的役割を果たしてきた）一方、国際情勢の変化―冷戦構造の成立―から、徹底的な反共主義の立場をとり、ソ連の軍事的脅威に対抗するため米国を盟主とする大西洋同盟（NATO）と良好な関係を構築することに比重を置くことになった。つまり安全保障政策の中核を担うものとして親米関係が対仏協調路線と同様、外交の根幹

に据えられたのである。そしてこの2つの同盟関係はウィリアム・ウォーレス (William Wallace) が述べるところの、冷戦下において「この2つの併存状況が戦後の西ヨーロッパ政治の基本構造」であり、互いの理念の衝突なくして共存関係が成立していたと言え、換言するならば、戦後ドイツの外交がこの2つの基本戦略に支えられていた以上、今回のイラク問題を巡ってシュレーダー政権が米国との摩擦も敢えて辞さない覚悟で反戦の立場を貫き通す背景には、ソ連の崩壊による冷戦の終結で、米ソを対立軸とする二極時代から米国の一極主義か、欧州の多極主義かというポスト冷戦を睨んだ新国際秩序形成の過渡期に移行したとの時代認識に基づく外交戦略が張り巡らされている。

その上で、イラク問題を巡る米欧(独)の対立は欧州統合の深化—自我の覚醒—と冷戦構造の崩壊という時代状況に起因する問題と捉え、国際社会における欧州の復権を目指し、欧州における米国の影響力を弱めると同時に、EUの存在感と発言力を強め、その力を内なる力に転換していこうとする独仏の政治的思惑が見え隠れしている。その政策の一環として近年欧州では通貨統合、共通の安全保障を通じて将来的に米国から外交・安全保障・経済の面で自立したEUを模索していこうとする動きが活発になっていることから裏付けられるであろう。この両者の対立は冷戦後の国際秩序の在り方を巡る米欧の政治理念上の衝突と捉えるならば、必然的にこの欧州(EU)の政治的・経済的・軍事的自立志向が米国の一極主義志向と衝突する基本構造にあると言えるだろう。この結果、将来の展望として大西洋をまたぐ米欧(独)間の断層はさらに深まっていくのではないだろうか。